

## 「内なる不平等」を維持する構造は「外からのまなざし」の中にある

元成蹊中学・高等学校教諭 高野 聡子



### 1. シーク教徒のディアスポラ・コミュニティ

シーク教(ਸਿੱਖ)をご存知ですか。15世紀ごろにインド亜大陸北西部(パンジャブ地方)で誕生した宗教です。創始者のナーナクは、イスラーム教神秘主義とバクティズム(ヒンドゥー教の改革運動)の影響を受け、カーストによる差別を否定し、平等を説きました。聖地アムリトサルにある黄金寺院(ハルマンデル・サーヒブ、ਗੁਰਮੰਦਰ ਸਾਹਿਬ)には4つの入り口がありますが、すべて同じ場所につながっていて、「あらゆる身分と宗教の人々に開かれている」ことを象徴していると言われています。「シーク(シッキ ਸਿੱਖੀ)」とは、「従う人、教わる人」を表すパンジャブ語です。シークに対する「教える人」という意味の「グル(ਗੁਰੂ)」を、生存する人間ではなく聖典『グル・グランス・サーヒブ(ਗੁਰੂ ਗ੍ਰੰਥ ਸਾਹਿਬ)』としているところも、シーク教のユニークな特徴としてしばしば語られることのひとつです

インド本国では、シーク教徒は全人口の2%にも満たない少数派です。現在約2000人のシーク教徒が住んでいるといわれている日本にも、神戸の三宮、東京の茗荷谷や西葛西にコミュニティ・スペース(寺院)がありますが、他の宗教と比べても、多くの人々に認知されているとは言い難い状況でしょう。一方で、英国やカナダ、東アフリカなどには大きい規模のコミュニティが存在し、社会的に広く認知されています。これらは、第二次世界大戦後の復興政策のために、旧コモンウェルス地域に労働者として移住した人々が築いたコミュニティです。

私がシーク教を知ったきっかけは『ベッカムに恋して(Bend It Like Beckham)』という英国の映画でした。ロンドン郊外に住むシーク教徒の家に生まれた女の子ジェスが主人公です。ロンドンのヒースロー空港から中心部に向かう列車に乗ると、ジェスが生きる世界を感じることができます。ヒースロー空港の周辺には南アジア系の大きなコミュニティがあり、映画の舞台となったサウソール(Southall)駅の看板には、パンジャブ語の表示があります。初めてこの地を訪れたとき、両親の出身国であるインドの文化と、生まれ育ったイングランドの文化の間で揺れ動くジェスの葛藤が、この街のいたるところから聞こえてくるように感じました。当時の私にとってインドは、「カースト差別がある国」という非常に偏ったもので、カーストを否定するシーク教は「善」、素晴らしい理念を持った宗教であるという認識だったこともあり、英国のシーク教徒のコミュニティという対象に自然と惹かれていったのでした。



写真：サウソール駅の看板

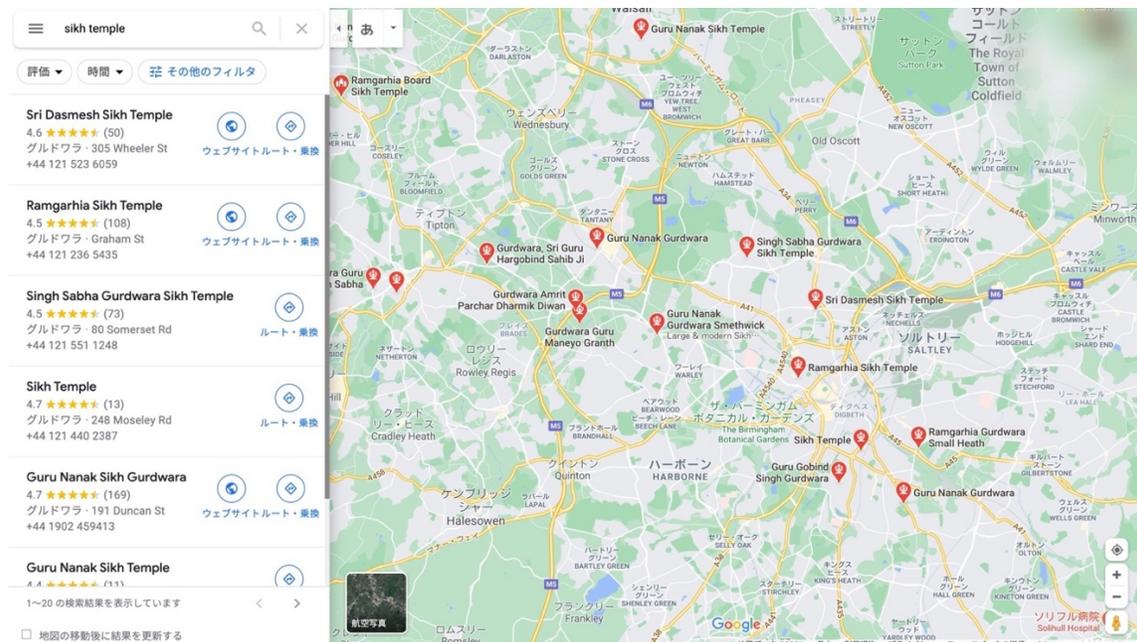
## 2. 「私たちの寺院ではない」—たくさんの「寺院」が設けられる理由

学校で習うことや本に書いてあることが、ある事象のほんの一面しかとらえていないということはよくあることで、イングランド中西部のバーミンガムでシーク教徒の調査をするうちに「別の側面」が見えてきました。シーク教徒は集会（サンガット, ਸੰਗਤ）を非常に重視しているので、その集いの場である寺院（グルドワラ, ਗੁਰਦੁਆਰਾ）はコミュニティにとって大切なものですが、イングランドにはこのシーク教の寺院がものすごく多いのです。バーミンガムやコヴェントリーなどの一部の地域では、ある寺院の目と鼻の先に別の寺院が存在するのです。



写真：寺院の食堂の様子。礼拝後には無料の食事（ランガル, ਲੰਗਰ）を一緒にとることができる。シーク教は「集うこと」を重視する。

下の画像は、Google Mapsのバーミンガムの中心地で「Sikh Temple」と検索した時の結果です。比較的規模が大きいもののみが表示されていて、規模の小さい寺院や、建物を間借りしている形式の寺院（週末のみ開かれる、次頁の写真参照）は表示されていないので、実際にはもっと多く存在しています。



画像：Google Maps「sikh temple」で検索の結果（赤いアイコン）

その地域の信者人口が多いから、というだけが寺院の多さの理由ではなさそうでした。ある一家は家の近くの寺院Aは「私たちの寺院ではない」と言って行かず、家から少し離れた寺院Bには行く。下の写真のように、倉庫やガレージを借りて、「私たちの寺院」を新しく作る人々もいる。たしかに、それぞれの寺院は名称や集会の作法が少しずつ違っていているようです。しかし、莫大なコストと労力をかけてまで、次々と寺院が建設されていった（2012年に新しく作られはじめたものもありました）理由は何なのでしょう。



写真左 West BromwichのHilltopにある集会場（兼放送スタジオ）の外観。寺院らしい外観はなく、Mapにも表示はない。  
写真右 建物2階の集会場部分。一部の人々にとっては立派な“私たちの寺院”として機能している。

話を聞いていくうちにわかったことは、それぞれの寺院は独自の出身カーストと強く結びついているということです。2012年7月にバーミンガムに到着したとき、駅の周辺で「sikh temple」と検索して最初にヒットしたのは、「Ramgharia Sikh Temple」でした。Ramgharia（ラムガリア、**ਰਾਮਗੜੀਆ**)は、シーク教徒の中の「集団のひとつ」と表現されますが、歴史的には特定のカーストと出身地に強く結びついたアイデンティティです。アポイントメントもなく突然訪問した（シーク教寺院にとっては珍しい訪問者であろう）私を、彼らは驚くほどのホスピタリティであたたかく迎えてくれましたが、一方でRamghariaというアイデンティティを前面に掲げているうっすらとした閉鎖性・排他性に矛盾を感じたことを覚えています。



写真左 Ramgharia Sikh Templeの外観。Ramghariaのサインあり。  
写真右 寺院内部、聖典が置かれたファサード。他の（Ramghariaを名乗っていない）シーク教の寺院と大きな差はない。

### 3. 移住先でカーストが維持されるのはなぜか

パンジャブ地方から英国への移住者は20世紀初頭から少しずつみられましたが、爆発的に増えたのは1960～70年代です。政府が旧帝国領からの移住者を制限する方針を明らかにしたことで、駆け込むように多くの人々が移住しました。もともと労働力需要のあった工業地帯のバーミンガムでは、パンジャブ地方出身者のコミュニティの規模が拡大し、自然な流れでシーク教徒の手によって寺院が建

設されました。コミュニティの中で変化が起きはじめたのはこのしばらくあとだそうです。当初はカーストや出身地の違いを超えて協力して経営されていた寺院内で、人口が増えるにつれて、出身カースト差別が可視化され、差別された人々が別の寺院を建設するという動きが相次いだといわれます。

インドでは、職業とカーストが強く結びついています。憲法や法律でカーストによる差別が禁止されている現在でも、パンジャブ地方に多いシーク教徒も（教義上は平等であっても）この構造を維持していて、ジャット（Jat, ਜੱਟ）とよばれる支配カースト（ドミナント・カースト）が強い影響力を持ち続けています。しかし、移住先ではカーストと職業との強固なつながりは失われます。南アジアに文化的な背景を持たない英国の雇用主に雇われる時に出身カーストを問われるとは考えづらいですし、出身カーストに大きな差があっても、移住先では同じ労働に就くことだってあり得ます。インド本国での上下関係が覆ることだってあるでしょう。にもかかわらず、移住先でもカーストによる差別やカーストに紐づくアイデンティティが強く維持されている。インドにいた頃よりも強い排他性を感じる人もいれば、第二世代にも差別感情と差別経験が維持されている。移住先でカースト差別を維持しているものは、一体何なのでしょう。

バーミンガムに存在するチャリティ団体のリーダーは、新しく寺院を建設する行為自体が差別を維持していると指摘します。エスニック・マイノリティとして団結しなければいけないのに、分断を促しているのは既存の寺院を離れた人々であると。一方で、出身カーストが低い人々の中には、「センサス・プロジェクト」と呼ばれる活動で、あえて自らの出身カーストを明らかにしていこうという呼びかけをしている人もいます。出身カーストが明らかになるような「名乗り」をすることは、コミュニティに入ったばかりの私には違和感がありました。「カースト差別をなくしたいと言っている人が、自らの低い出自をあえて名乗ることこそが、カースト差別が英国で維持されている原因なのではないだろうか」。そのように考えながら、ラヴィダシア（Ravidassi, ਰਵਿਦਾਸੀ）を自ら名乗る人々のコミュニティで調査をしました。

#### 4. 「内なる差別」を強化する「外からのまなざし」

インタビューにおいて、カースト差別が多く経験されると指摘される場所として圧倒的に多いのは寺院内でした。このことはあることを示唆しています。雇用先という「公」の場では、カーストに関わらず彼らは「南アジア出身のエスニック・マイノリティ」として扱われます。インドでは職業や居住地が出身カーストと結びついていることが多いですが、移住先であるイングランドでは異なります。南アジア出身の人々が就きやすい職業や、集住する地域はあっても、カーストによる区別はほとんど考慮されないはずで、本国で有していたカーストに基づく自らの優位性を主張することができず、支配カーストの人々も人種差別の対象、抑圧される対象になります。「公」での抑圧は、「私」の場である家庭と「公」の場である職場の「中間地点」にあたる寺院において自分の優位性を主張する差別として表れているのです。

私が抱いた、「カースト差別をなくしたいと言っている人が、自らの低い出自をあえて名乗ることこそが、カースト差別が英国で維持されている原因なのではないだろうか」という「まなざし」自体にこそ、その疑問への答えが含まれていました。ラヴィダシアを名乗る人々が、「カースト差別の被害者」として声を上げているとは限りません。その名乗りによって目指すものは人それぞれ違うのに、「ラヴィダシア＝被害者」というレッテルを貼っているのは私でした。そして、移住先でもカースト差別が維持される構造をつくりだしているのは、カースト制度を遅れた、前近代的な文化であると一面的な評価をする、「外から」のまなざしだったのです。

研究をする主体が、自分になじみのある文化とは異なる文化的背景を持つ対象を調査するとき、知

らず知らずのうちに強い偏見を抱いてしまっている可能性は大いにあります。実地調査や参与観察をする中で、実際にそのコミュニティの人々と密に、長期間対話を続けるということでは、自分の中の偏見に気付くことは難しいのかもしれませんが。人々との対話を重ね、研究対象としてではなく友人として人間としての関係が築けた時、自分の偏見にある日突然気がついて恥ずかしいような、悔しいような気持ちになります。でも、このような経験こそが、社会学を学ぶ者としての一番の喜びであるとも言えるでしょう。

筆者のプロフィール

高野 聡子（たかの さとこ）

専門は国際社会学。2011年慶應義塾大学文学部西洋史専攻卒業、2013年バーミンガム大学修士課程移民政策コース修了、2014年一橋大学大学院社会学研究科修了。修士論文は『ラヴィダシアはなぜ名乗るのかー移民社会で経験される信仰とカーストの構造』。2017年より2021年3月まで成蹊中学校社会科所属。2021年より東洋鍼灸専門学校所属。